廣惠濟急方

下卷

橫死之類
諸物入竅
中毒之類
婦人急證
小兒急證

廣恵濟急方下巻目録

諸物入九竅　目鼻口耳肛門陰門にもろ〳〵の物入る類を茲に集む

諸物入目　十七丁　目に物の入るなり

諸物入耳　二十丁　みゝに物の入たるなり　○鼻に物の入るを附す

誤呑銅鐵物　二十三丁　とりあやまりてかな物をのみたるなり

諸物哽咽　二十七丁　いろ〳〵物のんどにたつなり

卒食噎　三十丁　食物のんどにつまるなり

蛇入人耳口鼻肛門并婦人陰門　三十二丁

諸物入肉　三十三丁　とげをたてたるなり

子癇（しかん） 六十五丁
くわいにんのおなご胎内の子むなさきへつきかけ歯をくひしばりむせうになるなり

妊婦腹痛腰痛（にんふふくつうようつう） 六十八丁
くわいにんのおなごはらいたみこしいたむなり

子鳴（しめい） 六十九丁
子母の胎内にて鳴なり

臨産急證（りんざんきうせう）
さんよりまへの急病ならびに載す

難産（なんざん） 七十丁
胞衣下ざるを附も

産後急證（さんごきうせう）

血暈（ちうん） 七十五丁
ちのみちなり

崩漏（ぼうろう） 七十六丁
産して後俄におびたゞしく血おりるなり又にんしんするうちにして血おなく下るも此法よし

小兒急證　こどもの急なる病證を集む

走馬牙疳（そうばげかん） 丸十二丁

はくさかりはぐきくされはおちてしするなり

廣惠濟急方下卷

法眼侍醫多紀安元丹波元悳編輯
男安長元簡　校

横死之類

煙薫死　けむりにふすほりしぬるなり

凡火災等の節人烟に薫頭痛嘔吐し遂に迷悶えて死なんとするなり

療法　生菜菔根を嚼く其汁を飲下して

もし生なる者なきときハ莱菔子を水よ研し其汁を飲でよし凡失火等れ節ハ速よ莱菔根一切ちと口ふ含バ烟中を奔走てしも死を免
○又方葡萄を多く喫て死を免べし 秋末葡萄を多く採く皮子を去火よりけ煉く砂糖又ハ蜜少し加へ膏となし貯置べし又甲州ふハ葡萄膏又干葡萄あり預求貯ときてよし
○又方蒿雀 小鳥なり圖説後よ出せり の黒焼たゝ以へあらバ莱菔汁よ飲く最よし
○出火の節烟末又ハ烟の中へ行って堪忍難きハ

急に地上に匍伏きて自己が口もと以土地上へ呵のくれを極寒の節凍手を温がごとくすべし

蒿雀

和名 あをじ 又あをしとゝ

大サ雀ほどし嘴短尾長し形はやく長し頭と尾の付ぎハ淡青茶色にて羽黒くうれありく雀の背色に似たり尾も黒く腹ハ淡黄色なり此鳥ハ志とゝ此類にて青きある也青志とゝト名く志とゝの類多し皆頭にかざしあり鵐ハこのごしなし

餓死うへてしするなり

人累日絶食饑困て死となるハ先飯を與喫ことなかれ若喫せしむれバ立所に死す且妄に服藥を用べからず

療法 手拭様の物を熱湯に浸し臍腹を熨バ自然と回生るべし其時白湯の中へ味噌汁又ハ米飲少し投冲て攪嚥しめ腸を滋潤し其後に熟たる稀粥を喫て兩三日の間に段々其

粥を濃くして食せ數日の後に軟飯を與へ喫せてよし

凡飢人白粥を食しむきバ死を慎べし

往歳或國凶年にして饑人秋にまぎれて男女老幼數人街頭に徘徊して後にハ飢困或ハ倒れ或ハ匍匐徒に呼吸のみなるまでなりし行客中富商なりど見て忍ずて食物を與ゆるに食物ハ大抵搏飯なりし其飯を喫ふる人食しおはりて頓に斃或ハ未半も食せずに手に持ながら死せしとなり是を與ふる人ハ右の法を志らざる故なり情有く哀れきの至りなりけれや慈仁の心なれども其術を志らざれバかへりて人を害する事あり茲に記して後人の鑑戒とす

縊死（くびきしまりたるもの　くびくゝりしたるもの）

凡自縊人を救ふにハ必騒て先縄を截断べからず若妄に縄を截バ死す妄に縄を截断ときハくるし所よくしまるゆへなり此理をよく合点すべし先救人ハやく縊人の背後へまはりの縊人の垂るゝ両の手臂ハうへより緊と抱留く縊人ハ身少し高くさせる心持して抱き別の人何ぬくも在合の物笥の類又ハ臼様の物杯をよしとれ縊人ハ足の下へ入踏留になる様に置て抱る人も倶に其

臺のうへに登りいるべし如斯して後縊人の足
の踏留の様子を看定るうへにて別人縄を截断
よくきれる利べし扨此縄を截るとき抱たる
刀のごとく切べし
人縊人の臍の次に両手を當てかたく腰を抱住い
て縄を截断と一時に嘔と聲をかけながら腹を引
しめ上の方へ抱上る手あく按摩べし縄を截と
腹を按あ
ぐると一拍子にすべし二段になりてハ此時縊人初
あし按摩る様ハ下の圖を考べし
て息吹かへすその折り此拍子をはづさぬ様り

まるを専要なり扨息吹入しても抱たる手ハ能ゆる
めぬやうに躯を抱住ながら縊人と倶に抱人も
そつと下に坐るべし縊人ハ両足を踏伸させて置
此時別人手を添て倒れぬ様に扶抱て代り合
初抱たる人左の手にて縊人の襟能とらへ右の手
にて縊人の身柱次より七椎の次まで能撫おろ
事を六七遍して後項後を按捺こと二三遍して次
に瘂門の両傍の太筋と頭の枕骨との着ぎハ

處にて捉定なること暫して後背の六七椎の
次に手掌ふくもこと打べし打法ハ打るがごとく手にて下の方へ打おろすべ
し此意味るく 此時初く正氣小なる者ぞ右
の救法五ツの次第あり左の圖にて考べし○
正氣付たる時肉桂薬店にありを濃煎合与へ
消息ひく粥清を与飲しめ喉腸を濡てよし

縊人を救法圖

㊀ 縄を截んとせバ先ツ下の縊人の足の下へ臺にまへるか又ハ抱きたる人と心を
合せ一拍子に截べし○縄を截て後ハ其まゝ抱ながら縊人と共
にすわるべし其次ハ左の圖を

大抵縊死したる人足跗垂下らざるものハ救法を用て活ることのなり垂さがりたるものハ活ずとしれ

肛門より糞もきたし者亦活がたし

此人ハ縊人のうしろへまハりしかと抱き縄をきるまで縊人の腹を引しめながら上へおさへ擲ながてよし

抱し人の手縊人の臍の上に置て押あぐる様よし

縊人の足ハ下へ如此臺を踏留すべし

㈡

下にはさまりたる時別の人手を添へ扶て足を伸坐せしめて此法を施すべし

右の手にて縊人の背を撫おろすべし

ちりけどころと云ハ首すじ此へんより下へなでおろすべし

左の手にて縊人の襟を捉へゐることくれてよし

縊人足をのべること如此

七の図んと云ハ此所のへんまで上よりなでおろすを六七遍すべし

(三)縊人の頭項を救人の左の指頭にてくひねるを図のごとくするを二三遍すべし
其次よ

救人の手の如斯

(四)此ぼんのくぼの両傍の点ある所を大指と中指の頭にてきびしく按つけくるを暫くして

(五)此所ハ大体七の椎のへんなり
此ところを ひら手にて打べし

此時精神志ろくまる しれ也

衽ハやすらり提ぐるべし

此ひら手にて声掛ながら打く下の方へ引べし

下の方へ打ながら引下べし

又自縊人他の人早く見つけ未氣絶ざれバ已
ニ昏迷りんとするハ速ニ扶て葱の心を採其
人の耳孔と鼻孔の中へ深刺こみ血出て甦○又
方梁上塵を採大豆の大許竹管ニ入き四人同時
ニ力を極て両乃耳と両の鼻孔内へ吹こむべし
○灸法急ニ人中の穴ニあり図説中風ニ灸すべし且両
足の大指乃内の爪ノ甲の角を離る事二分許
の所ニ灸も 是隠白の穴也 図中風ニ出も 各二十一壮ばかりして

よし○又法縊人の身を抱定稍高く志ハむれバ縊る所も稍寛ぬるなり仍て衣被を覆て安臥しめ先一人手にて衣物にて褁其手あく縊人の肛門に志かと按女子ハ陰門も按をかり又一人ハ両脚にて縊人乃両肩を踏手にて縊人の髪を挽たりゆるまぬ様にして居べし又一人ハ手にて縊人の喉嚨を正し且胸を按揉又一人ハ縊人の臂と脛とを摩揉伸て屈たりしを已バ諸僵

屈めハ宜しく強く伸し甚上ゟく縊人の腹をと按摩べし

如此なるヿ小半時ゟしそ縊人眼をと開き呼吸なそ

べし然まども引きり按りまるを已

ハ少しく藥又ハ粥清をと與へのましめ稍噎へ

様ゟなりたる時両人ゟそ一時よ縊人乃両ノ

耳孔をと竹管ゟく吹べし此法亦よしとハ

溺死

人誤て水中に墮る者あらバ急に竹篙或ハ木版等の物を投こと與べし溺人執毎る物あれバ浮故水を呑こと少して救易し竹篙木版にかゝりてハ水によく浮物を投與てよし

凡水ハ泅心會ある人誤りて溺るゝときハ竹木の類の浮物あらバ捉ゆるときハ力にせんとして是を抱付なんどすれバ我身の重みにて其物と共に沈て溺るゝ者なり此故に惟かゝる時ハ手をうけても溺れぬ様にかゝへいるゝときハ沈む事なし

已溺水たる人を救とせハ急ニ水中より倒り
提出し牛の背上に横に臥し死人の腹を牛の背ニ
合牛を牽て徐て行めバ腹中の水自吐出す
○又方溺死したるを救に白礬の末を鼻孔中に
吹入熱鹽を臍中ニ擦猪牙皂莢薬店に末ありて
綿に裹穀道の中へ納置釜或ハ鍋乃類を地上に
覆置其上へ溺人を俯に臥溺人の臍と釜の臍と
を相合く脚後を稍高し手を以て溺人乃頸を

托バ口中より自から水出て活きべし若口噤く
閉ざるハ筋を横に銜てさし圖と合せ見るべし
○又法溺人を水中より倒に引あげ平地に置き
溺人の背後より抱住前に藁を焚く火の氣を
腹へあて烟を面にかざる様にすべし水を吐出さ
者あり若水出ざる時ハ抱たる人直に其手にて
嘔と聲掛るがごとく溺人の臍の次をうへの方へ
按あげ廻し水出るとあり此法簡便なり何分

火を多く焚て煖薫るをよしとす
○又方一人健なる者を選び溺人を仰ふして倒に背ふ肩両の足を肩にかけ十五六間も走バ水自然と口中より出る事あり　下に図
水を吐尽して老薑を擦て牙歯に塗り白礬を末にして管を以て鼻孔中へ吹入毎にあり
白礬なきときハ酢を多く鼻孔に灌入てよし
甦て後臍中に二三百壮灸すべし

凡水死の人烈火烘を忌寒氣内より入て死を

救べからず

○能泅者といへども水の中にて轉筋する時

ハ多くハ死するものなり早く自身にて手を以

て足の大趾を力を極て痛程り屈むべし

諸筋舒て死に至らず

以上の諸法を用ひ水を吐せる後ハ凍死の所

を見合て治法を施すべし

救溺死人圖
脚後ハ藁をしきて稍高くすべし
壹人ハ溺人の頭を両手にて擧水を吐せしむ
同上
如是乗置左右より壹人づゝ付添扶く
そろ〳〵と牛の綱を牽行ましむべし

又溺死救法

同上

如是背に負て小足に走ときハ口より自然と水出るなり

凍死 冬月雪中抔にこゞえ死せるなり

病状 初ハ顔色青惨或ハ目運し後にハ惣身迄ふるひ手足ふるへ漸〻に冷あがり殭直になり脣の色青黒脈至て沈伏或ハ脈も絶に至り口もの云ことならず遂に倒れ無性になる也

療法 先扶て煖なる室に入凍人の衣を脱去せ傍人の着せし熱衣に包て米を炒熱し或ハ竈下の灰を熱く炒袋の内へ入れ病人の胸を熨し

あたゝむべし冷なれバ換て数度もむべし極く酒と生姜の絞り汁等なるに和白熱く煖して飲しむ施し〇冷極りて唇青く脈なく陰嚢縮上りたる者同法をもって心頭を先熨法（方なにあり）を以て温め臍の中氣海関元（條圏説あり）二穴中風の穴に十五壮灸すべし右の法を用て口中氣出て後に稀粥清を稍ゝと灌のませ又ハ生姜湯を其間にまじへのましめて漸くに醒施し

熨法

醶酢に麩皮（麦のかす皮なり）を拌て炒布袋に納め入て心頭臍の邊を熨べし○又法大葱白一把線もて紮上と下を切りてそろへし如是なし又麝香二分五厘硫黄二分五厘（二品共に薬店にあり）此二色を臍の内へ納置き其上へ右の切たる葱白を安其上を熨斗様乃物へ火を盛て熨のべし葱たゞるゝと抱換て熨べし病人手足温に汗發て愈るなり若火もち抱處れ

バ凍人ハ毛氈或ハ藁薦杯ニ裹ミ索ニて繋
定平穏なる處ニ放傍人両人ニて相對て裹
置たる凍人を數次も軽く往來へ滾轉べし
四肢自温和ニなり活べし○水の中へ落て
凍たるハ先濕たる衣を脱のへさせ水を吐せ
て急に右の法を便ニ任て用べし邊く火ニて烘又ハ
熱湯ぬく一概ニ浴らしむべからず若一のいりあたゝむれバのちにさずぞ死す○又凍死
まるハ藁の籊を採く夥く積其人を裸體

に於ハ其内へ安臥せしめ其上にも藁の蓆を
多くかけ覆ひ面ばかり出して暫して漸
に温めなりて蘇生せし後ハ温なる稀粥を
も飲しむべし○又寒氣に中りたる人
湯にて芥子を練り臍の内に填衣類をかけ
置手帨を熱湯に浸絞りて其芥子の上を度々
押温めし冷バ取かへて温てよし○又方
黒豆一合炒焦熱を早く篩様の物へ入其上より

酒三合許浸りけ其滴し酒を飲てよし

雪中遠路を歩行する人ハ藁の襪を多く槌て軟かして陰嚢を厚く包其上に褌をきつくしめ尚又窮袴等を着すべし凍死に免る毎し○山中抔雪吹に遭死するとあり是を防ぐにハ藁をもつて鼻孔も口とへ厚く當其上へ覆面頭巾を着すべし雪吹ふく吸呼に障なしへ死するに至らば凡雪吹に遭て死するハ雪風鼻孔と口とへ吹さし息をとむる故なればなり

○熱き粥多く食し又ハ味噌汁熱して多く飲くよし糍糕又よし酒ハ一旦酔ざる内ハよし醒るとき寒氣一倍によく傷る也何しし○雪中なりとも極寒の節遠く歩て寒氣襲さるれ覺へバ頓く陰嚢を温べし焚火もよし

雷震死 いかづちにうたれ死するなり

雷に撃るゝを軽きときハ氣絶しうるとも理療を加へて蘇ることあり

療法 其人を仰に臥し胸腹の上へ活鮒をおきて鮒動揺バ忽ちに蘇るなり 服薬ハ附子 薬店にあり 一味水に煎じ用ゆべし 雷近隣近地に震ひゞく響きに驚き昏倒さする ハ中巻驚怖卒死の條の理療を用へし ○雷火のために皮肉を傷られ焦爛腫痛にハ降真香 薬店にあり 香をもやし紀きなり

焼てその煙にて薫ずれバ虫ハ汁出て愈るなり

○又方玉蜀黍 又唐もろこしといふ 穂苞茎葉ともに

煮て汁を取り焦處并頻薫洗てよし

諸物入九竅

九竅ハ目二ツ耳二ツ鼻二ツ口一ツ前陰後陰と雜て九竅と云

諸物入目

目の内へ諸物の入るハ礫瘢とも手にてふくべからず若しもみ摩なとすれハ大に害あり

稻或ハ麥の芒目の内に入るハ大麥を煮て汁を取除くゝ洗ふべし 洗法ハ後に出せり見合すべし○沙塵の目に入るハ面を溫水の内に浸置眼を開て面を數々振べし沙塵自ら出べし○又方大藕根搗爛絹につゝみ眼の内に絞く汁を滴入べし○偶

颸風のときハ野蠶蜘蛛乃絲入目て睫澀痛て開
このび雨乃鼻より清涕を流すときハ上好金墨を濃
研く新き筆よ點く目は中へ塗て目を閉て
少時ありて手指以て目を開らしめく看る
ときハ其絲一ツ所へ聚く白眼の上よ在るべし
新き筆よく内背の方へ輕く揩よせく置無名
指の頭よて鼻の方へ拭出すときハ愈若いで
ざるときハ再塗べし ○沙塵草木石目中ふ入

まる八人の乳汁を多く注入べし○又方書物等の間に生ずる所の白魚（図説下にあり）を研ぼし乳汁に和て目中に注入るべし最良○凡沙塵等の眼中に入るハ柔なる紙を引裂く燃子にして其人を仰臥しめ軽くと外眥より拭とるべく無名指にて内眥の方にて鼻の方へ拂出すべし○烟渣目に入るハ湯などに洗とも愈痛まバとのめり新筆或ハ亂髪にて

緩々と拂出すべし○石屑眼中へ入るハ髪の毛など一二本抜取小く輪にして目の内を拂ひ去べし○又方沙塵眼ニ入多るを覺バ急ぎ上瞼を撮あげて頻に放しすこし撮あげて放つこと數度すれバ沙塵一ツ處へあつまるものなり其時内眥にて名指をもつて鼻の方へ拭て出すべし○又方塵埃右の眼へ入りたるハ其人なと左を下にし左の眼に入るハ

右を下にして側臥さしめて塵の入たる目の上胞を撮あげ置く外眥の方より新しき筆あんまる紀筆を用べし　水をふくませ毛水を滴らくべし睫間あく数度流のくれバ沙塵皆内眥へあつまる此時より薬指の頭にて鼻の方へ拭去

内眥外眥圖

外眥と云

内眥と云

白魚

和名しミ　江戸俗間にきらむしと云

衣類書紙の間に生る虫なり形ハ小き魚に似よう尾に二岐あり色白く銀の粉を塗たるごとし夏秋の間多し

諸物入耳中　諸物鼻に入るを附たり

百蟲耳に入るハ蜀椒を末となし酢に和し耳中へ灌入べし虫自ら出る○又方葱乃涕を耳中に灌入て虫自ら出ル○又方鶏冠血を取耳中に灌入て蟲出ず○又方好酒を耳中り滴入も亦よし○又方猫尿無きときハ生姜を切て切口をもって猫乃鼻を擦バ作尿する耳の中へ滴入るれバ蟲出ぬり ともなり

○蚰蜒蜈蚣耳に入るハ胡麻を熬て葛嚢乃

中よ貯く枕とすれハ蟲其香を聞て自ら出○又方諸鳥獣の肉を炙く耳を掩く蟲自出○蟻耳中よ入るハ一切香物沙糖乃類耳孔の邊よおくべし自ら出る○百節蚰蜒幷蟻耳孔中に入るハ醋を灌入くきし諸蟲皆此方を用てよし○又方小蒜図説下よあり洗浄し擣く絞汁を取耳の中よ灌て蟲自出○又方蚯蚓を取葱の葉の中へ納く置バ化く水となる此水

故耳中に滴入るれハ虫亦水と化る○又方黄蠟を軟めして筋のごとく細長して耳の中へ挿こみ徐々に牽出せバ虫其端に著て出づ鬢つけ油を筋のごとく挿込べし○又方麻縄の端を揉て散し如此して膠を濃焊く其端に傳て徐々耳中に入るときバ蟲粘着て出此方虫のミならず諸物耳中に入るゝに皆用ゆべし○又方假令蟲左の耳へ入ときハ片手

ゆく右の耳を緊しく閉片手にてハ両の鼻
の孔を撮く緊く塞ぎ扨口を閉く嗢と軀べし
左耳の蟲自出右の耳へ入たるハ左の耳を塞
て軀を前法のごとし○又方夜中なれバ紙
撚に火を點し耳の邊にはしよれべし明を
見きバ蟲出ることあり○耳中へ大豆の類入
しハ若し左の耳に入すらバ右乃耳を両の
鼻孔を自身ゆく塞き別の人中指ゆて患

人の耳の後下乃根に凹ある所を按ながら耳朶を撮く下の方へ引さぐべし此の後一ちやうしに患人嘔と噦バ大豆自ら出ぞ

右の耳に入しハ左の耳を塞ぐべし其外ハ同法なり

諸物鼻孔よ入て出ざるハ一方の鼻の孔へ紙撚を挿込嚔を取べし其拍子に飛出るとなり

一度ならず出ざるハ度々嚔を取べし

小蒜
和名 のびる
此草野邊に生じ葉ハ葱に似て細く
夏茎を抽て端に花を開く形圓にしてごとく
めく薄紫なり秋に至て實をなす生ずまで
葉根ともに臭葱に似たり
根ハ深く土に入る
圓にして玉なり
食料とするもの
なり
實の形も此ごとく紫黒なり

誤呑銅鐵物

誤呑錢并銅鐵物たるハ艾蒿一把水五合入半に煎じ頓に服すべし○又方韭の葉を羹となし多く喫飽し韭葉銅物を纏繞て肛門より下るなり○又方葧臍にあり（図説下）蠶豆（四五月の頃実る食料此品なり）と同く煮食よし又生にて擦多食べし香油に調服最よし○又方堅炭を末となし飯の取湯にて服すれバ大便より下○又方胡桃の

実なり餘料といふを多食すべし（すれこそのあり）○又方飴糖を多食すべし○又方冬葵図説下乃絞汁を其侭多飲てよし

誤呑金銀たるハ硫黄發燭に付るものなり茶店にあり此目たゝ乃目といふ物上品なり用ゆべし石灰二味各黒豆粒ほどよくく末にして酒に調へ服すべし○又方艾を水にて煎し飲べし○又方金銀銅鐵等化さゞるものハ縮砂茶店にありせんじおほく服して自下る

誤呑釣魚をつる鈎を呑たるハ糸に付たる鈎を呑しもの

ハ必其糸を引べからず急に水晶の珠子乃

珠又ハ粳糯小児弄ちの手遊を幾ツともく咽より出た

る所の糸にとをし漸〻と咽の奥の方へ其珠を

墜下すれバ自然と鈎乃このみをつきく出る者

なりなく仰で此法を行べし鈎その方重くなる

ゆへ自ら拔出るなり此理を考べし○又方先

筆管を二ツに割一ツハ捨て不用一ツを細に割りて

一端の方ハのこして置き此残し置し所を
紙撚にて結図のごとし

筆管
此処を細くする

此所をこよりにてむすぶべし

もと

此処をすこしのこし

右のごとく割たる所を喉へ入鈎を割たる筆管の筋の間へ挿込み細き筋を用て紙撚の結たるを向ふ方喉の方へ送れバ筋の開きし所しまる故ニ鈎しつかと留て動かず此を此手前の方

へ引く取べし取れ少しひねりて取べし鈎の
鬚をつけ筆管の簓乃間へはさまりて出る也

誤吞鍼

するハ磁石（薬店にあり）を嚥石なり針ほど棗の核許
〇（此大さなり）なるを一塊歯の前に附息を呵出ル
寒氣のせり凍さる手に息を（吹つくるごとくするなり）て數度すれバ鍼
自出〇又方癩蝦蟇圖說にあり數個を捕く頭を剁
て倒にし血垂出るを盌様の物に接一杯許を取
く喉中に灌入て時を移せバ鍼自輭になりて

吐出○又方飴糖を多く食して即出○又方
紫糖を丸く呑べし○又方蠶豆を煮韮を同
く食へバ大便より出

誤呑頭髪

咽に繞く出ざるハ亂髪焼灰となし
水に調へ服すべし

誤呑不潔物

不潔の物を誤く呑て咽に梗ハ款冬茎葉并に花共に食料となし
ままよれ乃根を焼て灰となし舌の上に点べし

誤呑硝子

誤て硝子の碎を呑たるハ款冬を黒焼を白湯にて

服すべし〇又方赤土山の崖など艸木の生ぜ水よざる所乃肥たる土なり攪て多く飲しむべし

冬葵

和名 ふゆあふひ
　　えんあふひ

此草冬を経て凋ず其状ハ図のごとし高二三尺ニ至るものハ脚葉のミ地よ付て茎を出さず花葉の間ニ叢開く色白し

葧臍 和名 くろくわゐ

此物浅き水の中に生ず三四月のころ葉を生じ枝のごとく燈心艸のごとし秋の後に至て泥の中に根を生ず形圓にして鬚根あり丸き玉色黒く内白し食料となるべし

癩蝦蟇 和名 ひきがへる

湿地に生じ卵ハ水中に産す眉の邊に嚢の如くなるもの二つあり通身顆礧ありて行こと極て遅し跳躍することなし亦鳴こと稀なり背茶褐色或ハ黒色紋帯となるあり腹ハ白して黒き斑紋あり夏秋の頃薄暮又ハ夕立の後杯に人家園庭に出て小虫を食もの是なり

諸物哽咽

諸魚骨哽咽

ゑるハ飴糖を鶏子黄許の大き通口に呑にまるべし若出ざるハ再三呑べし後ほど大きくて呑くらし○又方款冬花食料にするの物なり末を吹入き又其まゝ煎じて用ゆ花ちらし時ハ根を濃くせんじて用ゆべし○又方好蜜を含稍こと咽に入べし○又方象牙を削水にて服まべし○又方鯉の鱗或ハ芭蕉の巻葉何を

焼く末となし水にて服し出ざる時ハ再三
服すべし○又方細銅線を火に焼軟にして其
頭へ黄蠟薬店にありを無患子の大さ程附く綿にて
裹纏ひよくよく結付咽内へ徐々と推入べし
哽る骨自然と下るなり若下ざる時ハ再び
推入べし○又方新綿に白糖を裹梅の大さほ
どにしを其人に呑せ喉に入る時分其綿の端
をそろりと牽バ骨綿に粘く出るなり○又方

白梅核を去肉抜おしつぶし大指の頂ほどに丸め綿につゝミ線を結付冷煎茶にて呑下き
べし線の頭ハ手に持ち梅肉を嘔出さすべし骨
附出るなり

魚骨入腹刺痛　ハ呉茱萸薬店にあり煎服すれバ其骨輭
になりて出若出ざれバ再三服すべし○又方縮砂
薬店にあり沙糖等分煎じ服すべし鳥骨咽に哽るにも宜

鶏骨哽咽　五棓子薬店にあり婦人の用る末をつけて歯ぐろふしなり

服もて此物咽に入ときハ化して下る

蓍魚咽に梗ハ直に蓍魚を漫火に炙薫りて食すれバ即吐出る

竹木刺咽に刺さるハ榎の實図説下にありを二三粒を呑べし○又方陳皮薬店にあり一匁煎じ服してよろし

○又方貫衆薬店にあり濃煎服すべし

稲の芒を呑さるハ白餳を頻に食してよし

稲芒粘咽て出ざるハ箭頭草図説にありを嚼て嚥

下すべし

箭頭草 和名すみれ

此草野辺に生ず春の初苗株生し二三月頃花を開く色紫にして形図のごとし花の色白きのハ用ゆべからず又花に同じくして葉丸きものあり又朝鮮すみれとて葉に刻欠あるものあり皆用ゆべからず

榎の木

此樹大木ニ至る二月の頃芽吹出し
葉の形圖のごとし

三月の頃細花を開き秋の初實熟して色黄なり味甘し小兒好ぐ食ふ

秋の末に實黒くなりて胡椒のごとく冬の初め葉黄落るなり

卒食噎

人卒に食物噎く咽ニ塞下ざる事あり

療法 蜜少許を取て口ニ合く呑下すべし

餻餻咽ニ噎 えつ下らざるハ嚴醋を多く鼻の孔より内へ灌こむ可し 酸氣ニ噎く吐出すものなり○又方鉄漿 女の歯につける おはぐろなり 少許口中へ入れ入させてよし○又方先扇子の両方のおやぼね骨を取り捨幅ひろきハ両側を削せま

そして上を紙にてゆるく巻此端を咽へ入ニ餅
が奥の方へ突込てよし又牛蒡の根が
一尺許り切て咽ニ入き餅が奥の方へ
突込べし

此両方をばひろきハりづうをせまくすべし

此如くしうミを巻べし

茲にて咽の餅を奥へおし込べし

同

あや骨

蛇入人耳口鼻肛門并婦人陰門

凢蛇の竅に入らる此挽出んとて挽とい
ハる故深く入る又ハ中より斷きるゝゆへ
なり挽べからず

蛇の竅に入るハ尾を捉て蛇のちから竹木
にきれめて逆にすづきバ自ら出る者あり
竹木の無き所ならバ指めて撚𢌞し楊枝抔
にてかづるよし○又方蛇の尾を執て小刀
にて其尾を縦に割傷烟草脂多く蛇尾の傷

口へ納其うへを紙にても布にても裹て札置ときハ蛇自出づ或ハ山椒又ハ胡椒嚼くだきて納もよし○又方蛇尾を握定め其尾に艾にて灸すべし○若辛物を火にたくときハ蛇の尾を捉定め小刀をもて尾端の處を周匝に小刀めを入て皮を倒に剥脱ときハ蛇自出

○蛇出て後雄黄末を人参の煎汁にて服べし

又雄黄の末酒にて服するもよし

鷄冠雄黄と云よし薬店にあり

諸物入肉とげをさしてなるなり

物縫鍼にかぎらず鍼を刺てぬけざるハ括樓図説下の根を搗く泥のごくし其上に傅置よあり

し一日に三次ぬりかゆ易べし○又方杏仁菜店に搗爛し車の脂み調く其上に貼べしなり

鍼自出○又方萞麻子図説前の急喉痺乃像にあり殻を去く

壹箇研つぶし先帛をいて傷處み襯て其上へ傅頻看く若刺鍼の頭少しも出バ卽ふ抜とる

宜し或ハ白梅乃肉を入同く研く貼るも最よし
抜去る事遅きときハ好肉を吸出すなり○
又方菅笠に用ゆる菅にて針乃入たる前後を
一寸許離して採り又菅を黒焼にして水に
とき針入たる傷口に附べし必ず出る者なり
○又方螳螂下に図説あり の頭を研く糊にねりまぜ
紙をも銭の大許に剪く件ある糊を攤く傷處
に貼宜し○又方烏翎十五枚火にて炙焦末と

ぬし醋にて調針の入たる所へぬり其上を紙
にて蓋置し一兩度にて針自ら出○鍼の腹
に入たるハ櫟炭と樒木のこと末にして一二匁
汲みて冷水にて服すべし○又方鼠糞を糊
に和し貼てよし○又縮砂薬店ニ入水に煎服
竹又ハ木の刺たちたるハ鹿の瞳子を取り乾
し末とぬし糊におしまぜ銭大ほどに剪た
る紙に攤く傷處に貼置し其刺自ら出最妙

なり○又方鹿角を焼末となし水に和して其
上に塗べし○又方生地黄薬店にあり嚼爛して
罨べし○又方豉納豆なり塩の入ざるを用ゆ嚼て傅る
もよし○又方甘草梢嚼て津に和て傅て妙なり
○又方頭の垢を取て塗べし即出○刺肉の
中に在ハ温なる小便の内へ漬おくべし良暫して
出○鍼めて撥ても盡ざるハ人の歯垢を取
て封ずべし即爛なり○又方蝼蛄図説下にあり搗て

塗べし○又方螽（稲葉に生ずる虫なり図後にあり）其汁おしつぶし糊におしまぜ刺のうへに貼るべし黒焼にしたるもよし

水中にて貝の砕

手足の肉中に入り痛強く出ざるハ雨蛤（雨蛤虫）ハ図にあり活ながら擘き傷処に傳置てよし

海鷂魚尾に刺

たり此刺甚きるぞし若人誤觸て肉を傷バ大に腫痛忍べからず甚ハ死に

至る恐べし若此毒を被バ樟脳茶店に又ハ樟木の枝葉圖説下共に焚薫てよし○又方ミそご（魚なり又きびといふ圖説中巻小便急閉に出る）の肉を擦塗て妙なり

硝子を碎肉に入るハ赤土（山の崖など艸木の生ぜざる所赤肥る土なり）拭水に調き數〻塗べし

括樓

蔓草なり葉ハ瓜に似て岐あり毛もなし色緑にて光澤あり實ハ小さき瓜のごとし又長もあり色黄に瓢も黄にして青し仁を

瓜蔞仁と云根ハ甚大なることありあり皮の色黄にして中白し

此草に似たる者一種あり和に玉章といひ漢にて王瓜といふ又牛ごふりといふあり多く誤り易し然れども葉皆澀りて光澤なし実も気異なり辨にしるべし

螻蛄　和名　けら　すむし
此虫ハ土中に居く土を掘走ること捷し状圖乃ごとくにして茶褐いろなり秋翅長て飛夜燈火に近くものなり大いさ大抵圖の如し
蟷螂　和名　うまきり
此虫ハ圖の大の如く色ハ淡緑色首を驤臂を奮頭修腹大手二ツ状鎌のごとし足四ツあり草木枝葉乃間を走ること甚捷し
螽　和名　いなむし　又　いなご
此虫状圖のごとく翅足ともに青し夏秋の間多く稲葉に集り居るものなり大いさ大抵圖のごとし
雨蛤　和名　あまがへる
此虫状圖のごとく背の色青く腹白し艸木の枝に居て雨降ん時ハ聲高くして鳴ものなり是なり又背色も白きもあり

樟 和名 くすのき

俗に楠の字を用ることあり

此木葉の形図のごとく大木多きものなり葉枝ともに香あり

木を斫ところに心の黒赤ものは是なりもし香氣薄く木の心黒赤なるときは犬くすと言ものなり薬に用ゆべからず

此木を煎じて樟脳を作る也至て樟脳の香りあり

中毒之類（ちうどくのるい）

一ときはいつりどくにあたるなるかうふのせあり

中諸藥毒

中諸藥毒 煩悶て死せんとするハ急に藍 圖説後にあり 此葉を擣て絞り汁を多く服する数椀に至れバよし又ハ生藍草なきときハ青布青絹を水に洗て汁を取服すべし画家に用る青黛にいう 薬店画具肆にあり粉にするときハいう 玉あいろう 棒あいろう 何も用てよし 染家乃藍皆用てよし ○又方鶏子の黄を取て多く飲べし

瘥ざれバ再三に至るべし○又方人小便を新めして人の糞に和せ絞く汁を取服を多服するがよしとぞ○又方甘草壹匁黒豆貳匁煎じ服す一切の薬毒に妙なり○又方生葛図説吐血の條にありを掘採擣碎て絞汁を服す乾るハ煮汁を取て服す此汁を飲ば後大便下利く止ざるハ龍骨唐より渡るものよし又ハ此方乃讃州小豆島より出るもよろし何も薬店にあり末として服す末となしごのごとく其

儘なるハ煮て汁を飲も亦得○又甘草三匁水
三椀を一碗半に煎じ滓を去て後菉豆粉を入
再煎じ數沸し蜜半兩入て服す○諸解毒藥
を服するにハ猫の涎を用ゆ飲下すべし猫の涎を
取にハ辛辣な物胡椒番椒の類を其鼻に塗べし即涎出す

附子烏頭の毒に中る

ハ始の諸藥毒を解する
藥何もよし若吐て止ざるハ香油少許を灌飲
しむべし○又方多年陳壁土水に調て服す

○又方多く餳糖を食てよし

阿片の毒に中るハ始めハ酒に酔たる心地ゟて後にハ氣ちがうしなひ昏憒になることなり釅醋を温め熱して砂糖を入一二碗を飲しめ鳥羽ゟく咽を探吐却せしむれバ醒りぬることなり

巴豆の毒に中て大便下利く止ざるハ冷水或飲でよし冷飯冷粥新汲水に漬喫亦得○又

赤豆煮汁藿の煮汁黒豆の煮汁皆よく其毒を解す多服をよしとす又方黄連と黄柏二味薬店にあり等分にして煎じ冷く服も熱湯熱飯一切の熱物を服食すべからず

苦瓠の毒に中るハ吐利して止ず頭黍穰を焼灰となし水に浸して汁を取く多飲べし

斑蝥并に元青の毒に中

斑蝥ハ甲のある虫なり長さ五六分背に黄と黒との畫ありて見事なり觜尖て壹の赤き點あり多く豆の葉に集るものあり芫青ハ斑蝥に似て

青く光るもありしるハ菉豆又ハ黒豆又ハ糯
二種共ニ大毒あり
米ハ水ニ和く研汁を取服も○又藍の絞汁
多服てよし

鉛粉の毒に中

るハ麻油ニ蜂蜜を和飴糖をも
加く服も毒即解

砒霜の毒ニ中

此毒ニ中しる人ニハ湯茶を胸腹
與べからず仰臥させしむべし
絞痛吐しを吐ず面青手脚冷厥との也楊梅皮
圖後ニあり
咸みもの
薬多少ニ拘ぜ水煎服べし○又方急

小人尿或ハ人糞汁を多く服てよし○又方菉豆粉十匁黄泥十匁鶏子清九箇黒豆の煮汁ニ和て服すべし○又方膽礬 薬店ニあり金物并豆腐にしみなすり 三分研細し冷水ニて灌飲しむべし○又方鬱金の末 薬店ニあり 蜜少許を入水ニ和服す○又方白芷 薬店にあり 此末并井華水ニ調服ス○又方生螺を取研く冷水ニて服す○又方藍汁多服してよし○又方香油を其侭飲吐してよし○又方

砒石を服し遍身赤色をなし昏憒なり或ハ吐瀉する者ハ急に釅醋一碗許を飲しむべし

以上の薬にて吐又瀉なさバ毒解するなり

野葛の毒

山野に有り和名つたうるし蔓草なり其藤色赤節高く節の所ごとに葉三づゝ付て葛の葉に似く厚光あり節の間に花を開く細にして黄なり蔓を切バ汁出る人の身に付バ體にふき痛痒をなし
く食へバ人を殺す誤に中るハ急に鶏子三枚黄も白もてに和く呑下べし○又方野葛の毒に中り口開かざる者ハ一尺八圍程の大竹を

二尺許に截節を洞て其人の両乃脇と臍へ上へ右の竹筒乃切口をしかと當置上ル方乃切口より冷水を灌ぎて筒の内へ入盈し數度水を易けれバ口自開なり○又方甘草一味水にて濃煎じ多飲て良○又方香油に人糞を和て飲へし○又方葱涕を飲てよし

瓜蒂を服し吐不止

煩悶すれバ麝香（薬店ニ有り）湯にて服すべし○又方白梅肉を喫て良○

又方患人腰をとのけ桶に冷水を盛其水の中へ脚を三里の次まで浸し居て味噌汁を飲べし

諸薬効なき者ハ此方最よし

藍葉

和名 あゐたで

三四月苗を生ず葉ハ蓼に似て短く花紅にして赤蓼のごとし茎の高さ一二尺あり至る秋実を結又蓼の如し

此草柳葉まる葉ちゞれ葉の三種あり功能ハみな同じけれバ何れも用ゆべし

染家に用る藍玉を製る草なり

楊梅

和名山もゝ

樹數丈に至り枝を多く生じ葉圖のごとく冬を経て凋まず

春比末如是の花を發す

葉の状如是きものあり同種なり

五六月の間如是なる実を結ぶ食べし又実の色白きものあり中國の物ハ龍眼肉の大きさなるあり

中諸穀菜毒　蔬菓菌蕈の毒に中るを附す

大麥麥飯或ハ大麥麪條を喫て毒に中るものハ腹脹煩べし煖酒に生姜の絞汁を和く兩三盃飲てよし

小麥の毒に中るハ萊服の絞汁を多飲とよし

○又方赤豆の煮汁を多飲てよし○又方粟米随意に喫くよし　温飩索麪總て小麥にて製るものに食傷した るハ皆此方に○山椒杏仁あり薬店に皆麪毒を解宜し

糒を乾たる侭にて多食し腹内にて立腹脹

絶入んとするハ醤油并其侭飲てよし

餛飩多食

しを中焦停滞しハ生の萊菔汁

多く飲てよし凡飲食過多肚腹飽満するに

皆生萊菔の絞汁おほく飲てよし

蕎麥の毒に中

るハ楊梅皮（図説前にあり）并（茶店にもあるなり）

末となし白湯にて服すべし○又方蘿蔔の

絞汁多く服てよし○又方過食して腹飽

溺るゝにハ杏仁を喫バ即消なり○又方随軍茶（秋花さく萩なり）茎葉ともに剉水にて煎じ用ゆ宜し○又方九年母（東きとれなり）蜜柑の類の皮を擣て汁を絞取り飲てよし乾たる皮（あり）薬店にハ煎じて用ゆ宜し○又方海帯（海より出る品菜にてなし食ものなり）を煎じ用ゆべし

豆腐を食し毒に中

するハ腹脹氣塞て甚しきハ死せんとす急に菜服の煎汁を多服べ

但し何薬にても此煎汁にて用ゆ◯又方萊菔おろし汁ハ急に新汲水にて多く飲てよし

◯又方杏仁を搗て服すべし

諸野菜毒に中るハ葛の根を（図説中巻吐血の條にあり）掘採て切て水に煮汁を多服して良或ハ生なるを擦て絞汁を服すも亦よし◯又方香油を多飲てよし◯又方人乳を飲てよし◯又方童子の小便多く飲てよし◯又方苦參（薬店にあり）

山野のもの生ハ圖酢に煎じ飲バ吐く愈
謊ほり出す

菘菜を多食毒に中

毎るハ生姜を多喫て良

茶の毒に中

るハ砂糖を喫てよし ○又方

甘草一味煎じ服を○又方白梅を喫てよし

○多茶を飲て腹脹るハ醋少許を飲てよし

煙草の毒に中

るハ沙糖を水に調く飲べし

地漿造法後に出を飲とよし ○又方梹榔子薬店にあり

あり末にかし白湯にて服を○又方味噌汁

を啜亦よし

竹筍の毒に中れバ腹大に緊満て手を近つくべからず急に蕎麦の殻を煮汁を取多く飲べし生姜胡麻亦よく毒を解す、

芋艿毒に中るハ地漿造法は次に見ゆを多服すべし

○又方生姜汁を飲もよし

野芋の毒に中

野芋ハ野に自然に生ずる芋なり常に食する芋も畑に作らず捨置事三年なるハ野芋と同く大毒あり食これバ煩悶し死に至るなりたるハ土漿

後ニ説あり 糞汁人の糞乃汁なり 大豆汁 右の内何れも便ニ任早く飲て毒を解べし

慈姑を食して氣閉るハ生姜其毒を解

胡椒の毒ニ中たるハ緑豆末とかし服すべし

○喰て氣絶んとするハ香油を口中へ灌入べし

蕃椒乃毒に中るハ療法胡椒ニ同 吐血するハ吐血の條ニ有り

山椒れ毒ニ中 咽戟むせ氣閉或ハ白沫を下し

身体冷痺絶入んとするハ急ニ温湯ニ灰一

撮を入攪飲てよし 爐中竈下に在所の灰なり ○又方冬葵

圖說前の銅鐵を誤て呑乃條に出す の根を掘採洗浄て嚼下て

良○又方濃磨する墨汁を多飲くよし

○又方大棗三枚許喫てよし○又方急に新

汲水を多飲くよし○又方甚しきハ人尿を

飲てよし○又方菜油一滴を飲べし

諸海菜昆布海帯紫菜の類を多食すれバ腹

痛發熱白沫を吐出し急に嚴醋を飲てよし

木瓜實又ハ瓜の類など食て毒に中たるハ肉桂あり

薬店に𫝆一味水多く濃煎じ服すべし○又方石首魚圖説中巻小便閉の條ﾆ出を𫝆煮て汁を取多服すべし

銀杏𫝆多食すれバ小便閉て身腫香油を多飲よし○又方地漿造法にあり○又方藍汁飲てよし

桃を食し毒に中たるハ桃梟を取焼く末とし服すべし

桃梟とハ桃子の一ッ二ッ樹に残りて枝に附く黒くなりたるを云ふ

西瓜を食し毒に中たるハ番椒を剉水に浸濃汁を飲てよし

甜瓜の毒に中るハ麝香あり薬店に少許白湯にて服べし○又方塩を白湯に攪服を最よし○又方酒を酔ほど飲べし

菌蕈の類の毒に中るハ地漿を多く飲てよし地漿を製する法地上を掘て坑をなし新汲の水を澆て攪水の澄るを候て其水を用是を地漿と云なり○又方人頭垢を取て水に和て服

せバ必吐却を吐盡バ服毎くらひ○又方香油を多飲せてよし○又方陳壁土熱湯の内に入澄冷して飲べし○又方甘草薬店にあり麻油に煎じ服すべし○又方茄子能毒を解す何れにしてもあしくとも用ゆべし○又方忍冬、生草図説脚氣にありなくらバ其侭咬ひ乾たるハ煎じ服すべし○又方鯵魚の硬鱗図説下にあり取乾し末となし水にて用ゆ○又方生荷葉搗爛水にて和用ゆ

乾たるハ煎じ服も○又方人の屎汁服して一
切毒ある菌ニ中りたるニ妙也○又方吐下し
て止ざるハ茶の芽を末となし新汲水ニ服
も好挽茶あらバ用へし○又方藥無ときハ
冷水を多く飲べし○又方山梔子 圖説衂血剉ニあり
水煎じ服も

笑菌を食したるハ熱を發し面赤眩暈し口舐
水の如くなる唾出て笑てやまず極まれバ悲哭

或ハ血を吐て死も急ニ地漿造法前ニ見ゆを多く飲べし○又方人の糞汁を多飲てよし

松蕈ニ酔たるハ豆腐を食すべし凡先豆腐を食し後ニ松蕈を食すれバ不酔

凡菌久しく日を經たる者皆毒あり若毒ニ中たるハ茄子を煮て食し且其汁を飲べし

凡菌の類笠の上ニ毛ある者笠の裏ニ襉なき死者笠と莖と脆く落者夜見く光ある者腐爛きうつむく蟲ある者采歸て色變者木耳の類赤しそ仰巻く生ずる者菌を煮く萎屑飯粒を投

其色黒者煮汁人影移さゞる者皆毒有り

苦参

和名 くらゝ 又 まひりぐさ

葉ハ槐の葉に似たり図の
ごとし根の状図のごとく
めして黄色なり
至て苦し

此草處〻山谷野原或ハ田の畔杯よ生ス春生じ冬を凋夏黄白の花を開く秋七八月乃比実を結び莢をなす乃莢の内よ子あり小豆のごとし

花の状くのごとし

莢の状如之
内よ三四粒ツゝ子あり

鯵魚

海魚なり三種あり志まあじむろあじまあじ長サ二三寸より壹尺餘に至るもあり状圖のごとし

両邊に一道の硬鱗あり魚肆に是をぜごと云此を削取て用ゆ

中酒毒 油并に塩の毒に中りたるを附す

酒の毒に中たるハ菉豆を粉となし水に調て服す○又方赤豆煮汁を飲べし○又方菘菜煮汁を飲てよし○又方生藕を搗て汁を取服○又方沙糖を温湯に拌て服す○又方九年母皮を煮て汁を取多服てよし○又方葛の花圖説吐血に出すを水煎じ服す○又方桑椹を喫てよし○又方蔓青菜と米を煮熟し

て滓を去て汁を取冷を待て飲べし ○又方眼子菜圖說下に焼く灰となし服を其侭煎じ服も亦良なり

酒に酔氣絶たるハ小便桶の小便を去く其内へ徐〻と水を入浮したる垢を取急ぎ熱湯を茶碗に入右の垢を湯の中に入其清したるうハ湯を口中に灌入ればの鼻の中より氣息出く醒るなり

焼酒の毒に中

面青口噤昏迷なり甚ハ遍身色青黒或ハ血を吐或ハ血を下死とするハ冷水を飲しむれバ立死堅く禁ずべし若此毒に中るもの覚バ急に衣を脱横臥てしばしば衮轉するを數回すれバ悪心あり吐却して愈○又方其人を裸體にして温湯の内へ浸漬して煴煖ならしむれバ其毒おのづから解

焼酒に酔て醒ざる

八棻豆の粉を煖水に攪灌飲しむべし即醒○又方好醋を二三盃飲べし○又方甜瓜蔓とも小搗て汁を取口中に灌入飲しめて愈○又方蘿蔔絞汁を多く飲てよし○又方熱き小便を多飲くへし○又方胡瓜搗汁を取服蔓も亦用べし○又方葛の根 図説吐血にあり を採搗て汁を取口中へ灌入飲しむべし葛粉を煖水にとき灌入て飲

しむるもよし○又方甘草〔薬店にあり〕末として煖

水に服せ○豆腐を擂面胸腹に塗置ば醒るなり

阿蘭陀酒乃毒に中り死なんとするは塩を水

に煎じ五六椀服てよし

油煠物の毒に中るは九年母の皮を煎服べし

桐油乃毒に中たるは吐瀉止まで熱酒を飲べし

鹽滷の毒に中るは豆腐を絞て漿を取服べし

吐却して愈　豆腐を犯時は黄豆を水に浸し搗爛　汁を取灌下てよし凡熱飲すべからず

眼子菜　和名　ひるも

水田中に生じて葉の面ハ青背紫其状竹葉に似り六七月蔓延秋の末より冬ハ勿論春迄ハ茎葉なし根を掘取用べし

根の状如是し

中魚介禽獸肉毒

蟲の毒にあたるを附す
諸毒通療する方を附ス

諸魚毒に中たるハ鯗魚烏賊の干たるなりを水に煎じ服す○又方冬瓜を研く汁を取多飲べし○又方鮫皮鮫の種類多し研に用る皮用て良物を焼灰となし水に攪服すべし○又方苦参圖説前にありを三匁許酢に煮汁を取服し吐却してよし○又方紫蘇葉菜店に有り煎じ服す○又方黑大豆を煮て汁を取多く飲べし○又方酸摸圖下に乃葉を絞く汁

を取り服すべし○又方楱骨木図説中巻擲撲ニ出ル葉ヲ搗き汁を絞り取りて服すべし○又方山查子茶店ニ有リ。剉み水にて煎じ服すべし

鱠の毒に中るは生姜の絞汁を飲てよし

鱸魚の毒に中たるは蘆根池沼に生ずるものなり或煮て汁を取多く服すべし生なるは搗て汁を取服べし

鮹魚の毒に中るは海羅水にとかし糊に用ゆる海草なり湯に入れ烊かし飲べし又能諸魚の毒を解ス

鰹魚乃毒よ中たるハ妙なる豆を末となし白湯よ攪多く飲くよし○又方唐大黄薬店よ末とあり なし五六分白湯みて服すべし○又方橐吾図説よあり此葉を煎じ汁を取服すべし○又方櫻の葉又ハ櫻の子煎じ服す子ハ其侭嚼て良○又方鐵漿女子の歯を染るもの也を飲くよし○又方橄欖薬店よあり塩づけなく用ゆべし塩よ漬たるハ煎じ服すべし一切の魚毒を解す事妙なり○又方椎茸煎じ

服して妙なり○又方眼子菜圖說ニ前乃中酒毒よあく水に煮て汁を多く飲てよし此外一切禽獸の毒を解する事妙なり

凡鰹の毒に中るハ冷水を服すべ、のうば

河魨乃毒よ中

たるハ急よ鯗魚烏賊乃乾たるなりを剉水よて煎じ服すべし炙食もよし○又方青砥の磨水を多く飲てよし○又方白礬茶店よ抹末となし水よ調服すべし○又方人

糞汁を服すべし○又方無患子（黒く丸き木の実なり小兒の弄ぶ物なり）黒焼し水にて服すべし○又方藍蠟（詳は前の注にあり）菜毒水に解服すべし○又方茗荷の根葉ともに（食ふ茗荷の子出るところの根なり）筍茗を取て汁を絞服すべし○又方沙糖を服すべし○又方古銭（古き銭なりりうりう銭なり）一文口中に含み唾を頻飲こむべし

凡河豚の毒に中たるは辛熱香竄なる丹剤等を服すべからず服すれバ害あり

蟹の毒に中あるハ生藕の汁を取服を多飲てよし○又方生冬瓜乃汁多く服くらし○又方蒜を水に煮く汁を取飲てよし○又方黒豆の煮汁多服してよし○又方紫蘇葉煎服ん○又方丁子薬店よ一味煎服をそ

鱉の毒ニ中たるハ胡椒を喫てよし或ハ煎服を○又方藍汁を數杯飲てよし

揹甲螺の毒よ中るハ紅花一味煎下服てよし

諸禽獣の肉の毒に中るハ黒豆を濃煎じ多飲べし○又方蘆根を搗く汁を絞り或ハ煮く汁を取多服を○又方眼子菜図説前條に出ず多少にかゝはらず水煎服すべし

諸禽獣の臓を食て毒に中るハ人の頭垢を取熱湯に壹匁許を攪服すべし

禽獣自死物ハ皆毒ありて人食て毒に中たるハ急に胡葱葱に似て細きを野菜なりを剉く煮汁を取り

冷を待て多く飲てよし○又方生韭を搗く汁を取服てよし○又方人頭垢前條のごとくして用ゆ○又方白頸蚯蚓八九條擂爛酒和く其汁を多服てよし○又方壁黄土二銭水調服

鷄卵の毒に中るハ醋を飲てよし

鴨の毒に中たるハ糯米の泔を多飲く良○又方温酒を酔ほど飲べし

雉肉の毒に中るハ犀角（薬店にあり色黒きもの最よし）をろして水に和し一銭を服してよし

狗肉の毒に中たるハ急に杏人（薬店にあり）一二合皮共去く研つぶし水を入和合て滓を去て汁を服すべし血片下り愈或ハ山査子（薬店にあり）を加へ煎服して赤よし或ハ杏仁一味煎服してよし

馬肉の毒　療方犬肉と同じ○又方甘草を濃

煎て多く飲くよし　○又方人乳を一盞のとて良

諸の蟲を誤食

くるハ山椒を服てくし

蜈蚣誤て食し毒に中

たるハ舌脹て口ゟ出ぞ

雄雞の冠の血を取舌を浸且咽くよし

蜘蛛を誤て食し暴ニ死ぬるハ

猫の涎を取く

前の菜毒乃條よ解毒の藥併の通療乃菜を送取様を出せり以り𝆑もよし

下べし即吐出なり

小蝦蟆誤食

るれバ小便通ぜず臍下悶痛

死たる者あり生豉豆を蒸腐熟しゐるなり[illegible]りいふ寺納豆にハあらず

一合新汲水に投煎濃汁を頻飲てよし

中毒通療　細茶白礬等分末にして新汲水にく服す○又方五倍子（薬店にあり女子の鉄漿に入る物也）乃末を好酒にて服す吐下して良○又方臘月雪水諸毒を解す貯置べし○又方犀角（薬店に有烏き[illegible]良）これ鎊にすりたるを水にて服す○又方藍葉

図説前の菜揉汁を服してよし青黛（薬店にあるを）毒あり

亦よし○又方人糞汁飲諸毒を解○又方地漿を服すべし○又方香油多飲てよし○又方黒豆を煮て汁を取多服甘草を加て煎服極てよし此方最効あり或ハ升麻薬店にを加ふるもよし

橐吾 和名 つはぶき 又 つハ 又山蕗

此草多く人家庭の中に栽る葉ハ款冬に似て厚深緑色にして光澤あり款冬ハ葉薄く浅緑色にして光なし此草ハ冬も葉枯ず茎に緑あり

秋黄色なる菊ニ似たる花を開き
冬ハ其實房をなし一茎ニ數顆もなり

一切の魚の毒を解す
鰹河豚抔毒ニ中りたるニ最良なり

酸模

和名　もんば　まいも　すいらんぼ　ねのぎしく

此草正月頃苗地生し茎を抽三月頃花を開く状圖のごとくにして色赤し六月頃実赤くなりて枯るなり此草に似て大く花薄青秋枯る物を羊蹄大黄といふ此草ハ葉も花も味酸し羊蹄大黄酸なれバ二色ともに野にも水中にも生るなり

此草ハ茎を抱て葉を生ず羊蹄ハ枝の端に葉生出る

産前急證

胎動

【病状】妊娠の婦人胎氣和せず或ハ夫れ為に困られ胎動して腹痛絶入らんとするハ胎動と名づく其證腰より小腹へかけ痛く心へ搶あげ急に救ざれバ墮胎す或ハ産門より血下る

【療法】砂糖を白湯に拌服す○又方糯米二合煮く熟する時分葱れ白根十四五茎を入

再煮て食ふべし○又方辰砂薬店にあり五分鶏子白三枚よくよく調あはせて服すべし○又方當帰二匁川芎一匁水一杯酒一盃煎じて一杯半となし用ゆ○又方葱白を濃煎じて汁を取飲べし○又方竹瀝中風の條に詳なり取り多飲しむべし○又方葡萄の根を採濃煎多飲ば胎安

○妊婦八九个月の頃腹内動く子生とする、

療法　梁上塵や祢の桁もり等の上のほこりなり　釜底墨釜の底のすゝなり即ちなべずみなり　右二品末となし酒ぬくく飲べし○又蒲黄　図説中巻金瘡の條に出る　二匁新汲水にて服すべし

○跌撲或ハ重き物を持挙胎安ぜず或ハ子腹中に死する事あり

療法　急に沙糖湯を飲べし　扨當歸二匁川芎一匁　二品共に薬店にあり　剉水に煎じ酒少許入用ゆ

○惣じて胎動り用てよし

胎漏

病状 懐姙の婦人卒に産門より血下る事あり若房事を犯して血下るは真胎漏と名づけて總て此證ハ腹痛なし急に理せざれバ胎を堕に至る但し尿孔より血下るハ又別なり

療法 生艾を搗て汁を取り一匁（生なきときハ乾ものを）用ゆべし阿膠（薬店にあり 鄭手といふ 透明もの上品なり 用ゆべし）一匁白礬五分水一杯半入一杯に煎服す〇又方生地黄（薬店にあり）

末にして一匁酒にて用ゆべし○又方蒲黄
圖説金瘡乃一匁白湯にて用べし○又方鹿角
條にあり
屑にし鎊又ハ鮫皮にて當帰薬店に二味各二匁
くだくるべし
水三杯を一杯半に煎じ用ゆべし

子癇

病状 妊娠の婦人卒に項背共に強直く筋脈攣き急口噤く痰盛にして昏迷或ハ手足搐搦し角弓反張心下氣上衝舌を長く出し人事を志らバ暫くして醒復作を子癇と云此症救ひがたし若口より糞汁出るものあり必死也

療法 先介保する人左に認る法にて心下に差逆氣をおさへ且服薬を用ひ足心へ張薬をはるべし

子癇病婦を

介保人前面状

○先婦人を起し介保をする人ハ婦人の背へまハり右の脚を直にのべくゝまり左の脚ハおとし屈膝頭にて婦人の背の七椎の辺をおしつけ左の臂乃二ツで肘との間にて婦人のわきのしたをうけくかへ向せておしやる心持よくすべし其手の腕ハにて婦人の肩をおさゆるを肝要とすべし

○此腕にて婦人の肩をおさへ

○此二のうでと肘の間にて婦人のわきをうけ前の方へおしつけべし

左

右

○此拳にて婦人の心下右わきへ少し依る所をおしながら下せちのきへ押しあてる心持よくすべし

左

○此膝がしらにて婦人の背の七椎乃辺んを向せ方へおしつけ動かざるべからず

○此人ハ婦人のあしさきをおさへべく

介保する法

考べし
右ハよくして右の手臂をのべ握り
拳にて婦人乃心下少し右の方へ
よせて按はけ下にさへ按下れ
心おのづからまくべし左の手ハ向へ押し結
れ拳ハ押しかへされ合よし心
會べき
なり

介保人背面状

○婦人の心下と乳乃
下に通りあたりあばら
骨のきハのすこし右の
くぼへ筋さる所を按
て下よりさきあぐる
様押しふせぐべし

左
○此左手ハ前の圖乃
ごとく婦人うしろ
をかゝく

右
○此拳婦人
の心下をおさ
前の圖と
考合にへ
べし

左
○此膝頭にて婦人の
背の七椎乃へんを
おしつけるよし前
の圖と考合べし

右
○此あしハかまへを動かさ
ぬやうにして此圖の
ごとくの形ち
にてよし

動かす
べからず

服薬

車蝦図説後ニ煮皮を去肉を取先手以て婦人の唇を開噤る歯を蝦肉を以て擦る二三度みして其煮汁を口中に灌入て飲むべし口自開を候て其肉を喫しむ可し即效あり○又方淡竹を伐火に焙て汁を取多飲しむべし○又方艾葉を鶏子大半分許を酢二椀入一碗に煎じ服さすべし○又方葡萄を水に煎じ汁を灌飲しむ可し○又方熊膽五分白湯

みく濃よ犯辰砂(しんしや)あり薬店よ五分城送下(おくりくだ)すべし

貼薬法(ちやうやくのほう)　萞麻子(ひまし)あり薬店ゆもし皮(かわ)城去(さつ)て研砕(すりくだき)く糊(のり)とし

おしまぜ紙(かみ)よの厚く足(あし)乃心(うら)湧泉(ゆうせん)れ穴(けつ)よ貼(ちやう)

厚し紙(かみ)ハ径(わた)り一寸四方(はう)許(ばかり)圓(まるく)剪(きり)てよし湧泉(ゆせん)

れ穴(けつ)

此所へ薬を貼べし

くるま蝦

海中に生ず大さ七八寸より大なるもあり形圖のごとし龍蝦に比バ細長して背に硬刺なし

殻薄くして灰白斑の紋あり煮ときハ色淡紅く變ず環曲し車の輪のごとし故に車蝦と言又此に似て小く三四寸ばかりの物を芝蝦と言代用もべし

妊婦腹痛腰痛

懐妊中何故となく腹痛事あり

療法 塩一撮濡紙にくるみ炭火の内に入れ焼て赤なりたるを酒或ハ白湯の内へ入れ攪飲べし○又方急に黄汁を下すにハ黄芪

薬店にあり剉六匁粳米五合水にて煎じ服すべし

○妊婦腰痛又下血不止事あり前條に載たるも痛なし茲に載たるハ腰痛あり別なり

療法　艾を酒或ハ水にて煎飲べし○又方百草霜釜底の二匁欃櫚灰箒に作るを伏龍肝墨なり用るもよし竈の下の三匁末となし一二匁ぞつ白湯に酒と焦土なり童便を冲く右の薬を入攪服さすむべし○腰痛ぐうりぬらバ大豆一合酒三合煮て汁を飲べし○又鹿の角の尖五寸火の内へ入き赤く焼酒の中に入又焼く酒の内に入き如此すること数度にして右まへ酒を飲べし

子鳴 子が母の胎内よりなく啼なり

妊身の婦人傾跌或ハ強よ手を伸て高き處乃物を取ることあれバ腹中鳴ることあり胎氣安からざる故なり

療法 其妊婦片時許れ間鞠躬て居るべし自安し又ハ豆あくも何にても席上へまき散らし其婦人にひろはせてよし尤片時の間ひろはしむべし

臨産急證

凡催生乃際ハ用力太早を戒惟忍痛くほどよく飲食を進自然よ任く催迫の時を候へし一二日又ハ四五日に至るとも妨なし然よ逼迫乃候をまたバ妄りに離身さんとして用力をやきゆへ難産よ至者おほかれバなり

○凡分娩逼迫乃候ハ産母必臍腹急腰間重痛糞門逆急一身尽くあつくなり眼中火え如よなり胞水或ハ血倶よ下るとき母用力く努力べし兒已生る是其時りとまるなり

難産　胞衣不下を附そ

證候　正産ハ兒の頭正直よして生下このぬるを碍よ出るなり

産といふ又兒先足を露ちを逆産といふ又兒先
手を露ちを横産といふ又兒母の後のところへ挂
しちを振後といふ又兒母の左か右の方へ偏兒
の額角を露ちを偏産といふ右數證總く難産とは服薬の方又
大抵通用る故に今茲に一條とす
服薬麝香あり薬店に一銭水にて服すべし或ハ塩
豉納豆一兩舊青布に褁火に燒赤くなりしを
研末となし二味和匀て一匁許を秤錘を燒く

酒の中へ入れ淬て其酒にて服さしむ亦良
○又方雲母薬店にあり末にして一匁温酒にて
服す麝香少許入最よし○又方雞子三枚
黄ばかり酢を少し加へ酒にて服す○又方
清油と蜜あり薬店にと等分湯を少し冲てよく
調服してよし○又方古銭を火に焼赤して
酒の中へ入れ其酒を服すべし○又方人参
末乳香末一匁辰砂五分何も薬店にあり鶏子白一枚

生姜汁少入攪く服すべし○又方益母草図説疔毒にあり搗汁を煮て服れ

手法

古より難産の諸證倶に手法あり然れどもと歴練諳事人にあらざれバ軽易施しがたし且筆にハ其意を尽しがたけれバ唯其大略を載く猪生人をして心會しめ大謬なからんことを欲るゆゑ

○兒母れ産門の左ヵ右かたへ偏く生れぬるハ産母を仰臥せしめ軽く推て兒を上れ方へ推あぐる心持ふして兒の頭頂を正しくおちし置く後に産母努力ぬきせバ兒生下

○兒産母の後ぬ〳〵へ挂りたるハ看生人綿衣の類ぬて手ぬ褁ミ穀道ぬ外傍より軽くと兒の頭を推て正しくおさし置て用力毎し即生ぬ

盤腸産 臨産先子腸出ぐ兒生下て後其腸収らバ

療法 酢半盞新汲水茶碗ぬ七分目入調停て産婦の面ぬ噀べし両三度吹かけて尽く縮收

◯又方半夏薬店にあり末となし産母の鼻孔へ管にて吹入れば嚏出て收る◯又方太紙撚に麻油を浸し潤て燈を点て吹滅其烟りで産母の鼻の孔を薫れば即收る◯又方萆麻子薬店にありハ急喉痺に出る園説十四枚殻を去り仁をとり研て膏のごとくし産母の頭頂中髮を剃りて貼れば腸收まらバ急拭去べし

胞衣不下 兒生下時看生人産母の胸前を去らで

抱産婦も亦自分にて肚腹を緊抱べし胞衣下る○又右方にても不下ハ紙撚に火を点つて吹滅其烟にて産母の鼻の孔を薫してよし○右法にても下ざるハ看生人左の手にて臍帯をとく右の手の指頭にて胞衣の帯の着ぎハの所を探りとうと撮て緩々と引出すべし帯ハ極脆し手あらくすべからず手法左の図と参考爲し

服薬 海蘿 薬店にあり海草なり粘ありて人家日用なる物なりちと湯にひたしてとかし或ハ煮て服すべし○又方五霊脂 薬店にあり

鼠糞手といふもの用ゆべし一二匁末して温酒にて用ゆべし○産婦自ら髪の毛を口に含めバ嘔吐の心付ありて胞衣自ら下るものなり○又方荷葉炒て末し童子小便にて送り下すべし○又方牛膝二匁冬葵子一匁に二味薬店にあり冬葵圖説ハ物唖咽にあり諸水に煎じ服す○又方紅花干したる物べにをとる薬店にあり酒に煮て汁を飲てよし○又方鹿角末して生姜湯にて一二匁用ゆ

産後急證

血暈　産后忽然眼黒く頭痃して遂に神昏血暈となるを病家に混く血暈と會え血が下りし云なれども此證二ッあり一ッハ産後下り物少くて悪血上に攻て右件の證を見もあり一ッハ産後去血過多なる故氣も又俱に脱く神氣昏迷する者あり二證原ね此過に違バ理法も亦大に懸隔つ誤るときハ死生掌を反を混同せべからず其證左の如し

血脱昏暈　産の時血脱下ると既に過多氣も就所なし失ひ氣血俱りに昏暈になり人事なし不

省其面ハ色白く眼黒閉て開かだ口ハ開手足冷頭傾呼吸寂然たるハ血脱昏暈なり

療法 急ニ人参一二匁を濃煎し徐々と灌ぎ飲しむべし 此證人参ハ用れバ大ニ害ありと心得るハ誤りなり頓に虚したる證人参ニあらざれバ救ひがたし此故ニ臨産乃婦人あらば預獨参湯を煎じ置く急ニ備ふべしたし掛てハ間ニ合ひがたし ○若手足冷バ附子 菜店 あり一匁を加てよろし ○其症軽きものハ人

参當歸川芎各一匁水にて濃煎じ童便を加て用ゆべし鹿角を黒焼にしバ兼用てよし
○又方人参茯苓一匁づゝ辰砂五分入て末めし白湯にて用ゆべし
血逆昏暈　産後悪露下ることをすくなくして胸腹脹痛て或ハ一時昏暈血壅痰盛にて悪血心より上衝或ハ面赤色澤にして口噤頭仰頸直にて人事を知ざるハ血逆昏暈なり

療法 急に婦人の頭髪を提起し火盆に醋を沸く醋氣を婦人乃鼻中に沖入しめくよし或ハ小石鐵器の類を赤く焼く醋の内に投入其氣を嗅しむれバ醒む扨其醋を産婦の口と鼻とに塗べし○又方舊漆器旧椀杯ど此類何にても漆に塗たる旧物よし或ハ乾漆を焼く其烟を人に鼻を薫く其氣を吸しむべし○又方微醒を覺バ急に生鶏卵壹枚打破吞下さし兒

てよし若効なきハ童子の小便を多くのミくらふし尚治せざれバ竹瀝を多く飲しむべし又半夏を末となし管をもつて鼻孔へ吹入嚏を取てよし〇又方麒麟血薬店にありちまき手と云ものよし色至て赤きを用べし没薬薬店にあり煉没薬と云を用ゆべし二味一匁づゝ末となし童便と酒と半分まぜ合して温め右の末薬を用ゆべし紅花薬店にありの末又ハ蘇木薬店にあり赤き色を染る蘇木なりの末前のごとくして飲

てよし○又方欝金粉末（薬店にあり黄色を染るに用ゆるものなり）炒黒して酢にて用ゆべし○又方荊芥（薬店）あり末となし白湯にて用煎服亦よし

此證ハ前の脱證とハ違ふ人参湯用ゆれバいよ〳〵あしゝ用ゆべからず

此手ハ女子の膝がしらをとらへ自分の方へひきつけるなり

此手ハ女子のまへ向のところへおしつけるときハ両の手をたがひに引しむるゆへおのづから血止るなり

服藥 麒麟血茶店に有り火に焼て黒くし温水にて服す

又〱 元氣乏くハ獨參湯方ハ上巻の中風の條に出すを用也

𠑊し○又方木乃伊薬店にありうく香嵩きものよし

五分末にして酒にて用ゆべし○又方荊芥の穂薬店に有り焼く黒し細末となし童子の小便にて服𠑊し○又方槐花の條に有り中巻吐血一両百草霜釜の黒すり農家の物よし半両末となし秤錘を焼赤くして酒の中へ焠く其酒にて一二匁ほど服すべし○又方蒲黄図は中巻金瘡の條に出る二両水に煎じ服す○又方乱髪よくあらひ洗く油気を去るべし

雞子を大火に焼て灰となし百草霜一匁綿とめんをとほふまいをとちり一匁焼て灰となし末となして温酒又ハ白湯にて服すべし○又方大薊（圖ハ上巻疔毒乃像に出せ）の根を採搗て汁を温て服べし○又方棕櫚乃皮黒焼にして末となし米飲にて用べし

小児急證

初生卒死

小児初生て即ニ死する者あり急ニ小児の口中を視て懸壅に前上腭ニ泡ありて石榴子のごとくなるものあり急ニ指をもつてく摘破り悪血を出し布をもつて拭去て其所へ髪毛を焼灰となし摻べし甦者あり若悪血児の咽に入バ即死

撮口　はゞつきむしなり

【病状】其初何事なく啼く漸〻面色黄赤氣促啼聲出ず舌強て唇青口を撮く嚢のロかよせたるか如く乳ちを吮ず或ハ白き沫を吐手足冷ハ最悪證なり凡此證一臟の内よ見る凡バ十に一生なし

【療法】小兒の齒齦上を看べし小泡子ありて其状粟米のことくなる唖し急よ鍼をもつて

挑て悪血を出すべし其あとへ薄荷（圖説下にあり乾したるハ薬店にあり）生なれバ搗絞りて汁を取乾きたるハ煎じたる汁にて好墨を磨其児の母の頭髪少許取て手の指を裹て件の墨に蘸口内に擦付し後一時程の間乳をのましむべからず○又方先歯齦に生ずる所の小泡子を針にても指の爪にても掻破り其あとへ生蜜を點て効あり○又方熊膽を

湯にときて灌いれませてよし○又方牛黄茶店にあり爪の甲にため付て落ざるもの真なり五六分末となし竹瀝取法中風の條にあり如く調潅入度し○又方蝸牛図説上巻疔毒の條にあり研爛口の内へ塗べし

灸法

小兒の兩乃乳より臍へ斜對に線を張て斷截其線を二つに折く其正中に墨記[illegible]なすべし是灸穴なり左右供に二穴となる扨此二穴の最中に又墨如く記を付是ハ各穴小[illegible]

此記の大許一層て其上に一穴を點す是灸穴あり都合三穴となる一ヶ處に三壯或ハ七壯灸すべし左に圖あり参考爲し

撮口臍風灸穴の之圖

● 此ハ灸穴の印し
○ 此ハ假点の記し

薄荷

人家ニも栽置又野邊ニもあり

二月の季宿根より苗を出す葉對生茎方淡紫の小花を開葉を採揉く嗅ハ涼く辛氣香あるもの是なり

香氣ある物も外あり茎葉花実同しと言ども用ゆべからず

臍風

病状 面赤喘急啼聲出ず臍腫て突起腹脹満て日夜啼く乳を吮ことあたハず或ハ搐搦口噤く撮り凡臍の邊青黒ハ理すべからず

療法 臍腫るハ荊芥薬店にありを煎じ汁を取て洗浄葱の葉を火の上にてよく炙冷を候て指甲にて刮薄して腫る處へ貼付し○又方田螺三箇に麝香薬店にありを少許入搗爛て臍

上に搭須吏して再ぬり易て腫消す○此外
治法并に灸理前の撮口に同じ○又方大蒜
薄切臍上に灸七壮程すべし

初生便閉

初生の兒大便小便ともに不通腹脹絶いらんとする八忽ニ寸命を亡ふ

療法 婦人ねしを温水ふく口を漱小兒の前後心並ニ臍下と手足の心と七ヶ処を吸ひ赤くなる程ニて哂べし兩便自通ぞ○又方生葱の白根を搗く汁を取

頻ふをべし凡哂と三五次ふして再口漱て更右の七ヶ処ね赤くなる程にて哂べし兩便自通ぞ○又方生葱の白根を搗く汁を取

乳汁など等分に調小児の口中に抹く乳をの
たへ吮下しむれバ即通ず

初生丹毒 ちやうさなり

初生小兒遍身むらむらと赤くなることあり是を丹毒と言 俗にちやうさと云 此毒腹に入バ死すべし

療法 赤暈せし周匝を鍼にて刺て悪血を出し其跡へ芭蕉 人家園庭に栽るところの是なり の葉にても茎にても搗汁を塗べし或ハ赤豆の末鶏卵清にて和塗べし○又菉豆末二匁半大黄一匁生薄荷汁蜜少許に合て塗べし

○又方麻油を塗てよし○又方馬歯莧（圖説中巻）

咬傷よ（出を）搗く汁をぬりてよし

初生口噤不開

療法 天南星薬店にあり末一銭許に龍脳薬店にあり少許を入研白生姜の絞汁に調く指先にて兒の牙齦に擦べし立所に開くなり○又方牛黄薬店にあり末五六分竹瀝取法上巻中風に見ゆにて用てよし

驚風

急驚慢驚の二説あり又疱瘡の初に昏悶あるを附なり

急驚風 牙歯をくひしめ竄視手足搐搦或ハ反張或ハ壮熱或ハ熱なくて此證を發する者あり且大抵此證を發するときハ弓と叫聲をあげ目を引つる者あり併ながら初より壮熱ありてうとうと昏睡鼾をあげまたハ惟手足を搐搦して後より引つくる類もあり此を急驚風と云なり

療法

凡驚風昏悶不醒ハ急に熊膽を湯にとき兒の口を開き多く灌飲しむべし○又方辰砂一味温水に和し用ゆ甚よし
鶏冠雄黄（薬店にあり俗に雞冠石といふ）等分に加へ赤良○又方青礞石（薬店にあり）を水に磨て汁を灌ぎ飲すよし○又方涎潮甚しきにハ鐵粉（金きうの粉なり）辰砂（之）を薬店にあり
よくまぜ薄荷の煎汁にて灌のませてよし○又方蝸牛を研細にして何にても

も服藥丸中に入ﾚ用ゆ○灸ハ章門或ハ湧泉三穴ともに圖說上巻中風ニ出そ丸穴七八壯より十五壯に至るべし若聲の出ざるハ聲の出るまで灸してよし

右の證候并に理法ハ驚風實證に施されし處きなり實證とハ固無病なる小兒の風寒に感じ氣化よろしからず或ハ乳食停滯て此證を發し又ハ生人異物を見

驚怖るに因く亦此證を發るなり慢驚風ハ此に似たれども虚證なり別に證理を左に載そ

慢驚風 大抵大病の後或ハ大便瀉利或ハ吐乳食を數日乃後に俄て昏悶驚搐竄視等れ證あり

療法 先大抵艾灸をよしとし神闕氣海 圖説脱陽の條にあり 章門 圖説中風の條にあり 天樞 圖説脱陽の條にあり

諸穴に灸すること數壯すべし扨熊膽を
獨参湯のごとく口へ灌べし或ハ手足
冷バ参附湯上巻中風の條に出を灌與べし醒て後
も右の方を用ひ醫の來を待べし○或ハ痰
盛なるハ甘草一味多少にかゝハらず煎じ
飲しむべし

疱瘡初發昏冒　状驚風のごとくなるあり混淆
なすべからず其初の證ハ呵欠いき噴嚔し

て耳の尖冷えなるあり扨昏睡面赤顋頬亦赤く乍涼乍熱を発するに至て如斯にして俄に驚風のごとく驚搐ハ痘瘡の初候なり

療法

漫に灸をすべからず鍼をもよし次に○蟬の脱殻を細末となし飲のとり湯或ハ白湯に匀灌のましむ亦其侭水に煎じ用るもよし○又方青黛水に調服しむ

搐鼻法

半夏薬店にあるの末鼻に嗃てよし皂

莢(きやう)茶店にはり詳(つまびらか)に上巻中風(ふう)に図説(づ)あり　の末(こ)哉等(とう)分(ぶん)の加(くわへ)摘(ひねり)て

よし嚔(くさめ)いげる哉なしまれ

走馬牙疳

病状 歯齦損爛或ハ腫紫黒色ヲ成歯縫より鮮血出口内臭氣あり毒深ハ臭氣も亦はなはだし身ヲ熱ありて甚しきハ歯落唇鼻顋頬まぐくる攻蝕く脱去ヲ至る遅きハ死に至る凡疱瘡麻疹或熱病時毒等患ふる後息臭口中臭氣あるハ其毒清解せさるときバ早く良醫を迎て療理を請べし延握すれ

ハ此病と成る可恐

療理

先河蚌和名どぶがひ又ゑぼ貝煎煮て汁を取り患處を洗ふべし又淡塩湯或ハ米泔水にてよく洗ふもよし洗漱しるあとへ後の薬を搽塗べし○尿桶中乃白塗を刮とり火にてよく焙乾末となし麝香薬店に少許入合研あハせ患處へ塗べし龍脳少許加へ用ゆるもよし右上方中へ五倍子をごろぶし成り少炒黒し薬店にあり

銅青あかがねのさびなり薬店にあり等分末となし加へ
用ゆ最よし○又方蜣蜋糞缸中に生来るうじむしなり尾のなが
き蟲を数箇取りて焼灰となし麝香少許用べし
入く牙齦に擦又よし○又方白姜蚕このかいこ此くゝ
くなりてそのまゝと死するの薬店にあり或ハ蠶脱紙蚕のくをうむる あとのこのみなり
を焼く末となし麝香少許入よく研まぜて
患處に擦兪し○又方麝香黄蘗青黛雄黄
末となし乾摻べし若患處既蝕損死肌有

綿を筋様の物の端へ纏薬を蘸して蝕損したる死肉へ擦却て且軟帛にて悪血を拭ひ去りて右の薬を摻懸し此薬を用て効なき時ハ定粉女子の用るおしろいなり薬店にてハ唐土と云半両を加へ同く研て用ゆべし用様ハ前の方と同じ

服薬　大黄　青黛　乾地黄三味倶に薬店にあり剉て煎じ服或ハ末として白湯にて調へ服も又よし

廣恵濟急方巻下

植田文敬通央寫字

廣惠濟急全方三卷凡一十類八十六門門發以證證繫以方而草卉之形狀與灼艾之孔穴指示以繪圖凡暴疹卒病呼吸存亡之際醫不及延方藥至簡至便而扶危顛於逡巡拯苦楚于揮霍者蒐羅殆盡焉乃是家嚴數十稔間潭心研精博訪廣搜歷試經驗之所得非趙李敷歐士海胡其重等書徒收採前人成方之比也俾此書周布寓内城市邨野家講戶明備旦夕不測之急則免夫夭枉

咸遂生生之樂矣耳小子元簡受家嚴之命反覆校訂以授剞氏竊喜家嚴壽衆之誠心永賛
國家好生之至仁以弗泯乎無極因書筴尾爾若夫撰輯顛末佐野中野二序悉之元簡又何言焉

寛政二年仲秋前一日

不肖男元簡百拜書

東都書肆

須原屋茂兵衛
須原屋伊　八
須原屋善五郎
須原屋嘉　助

發行

上総国山辺郡福俵村
安川八重馬